

生死の工夫

山室軍平

特  
4

020912-000-5

特53-472

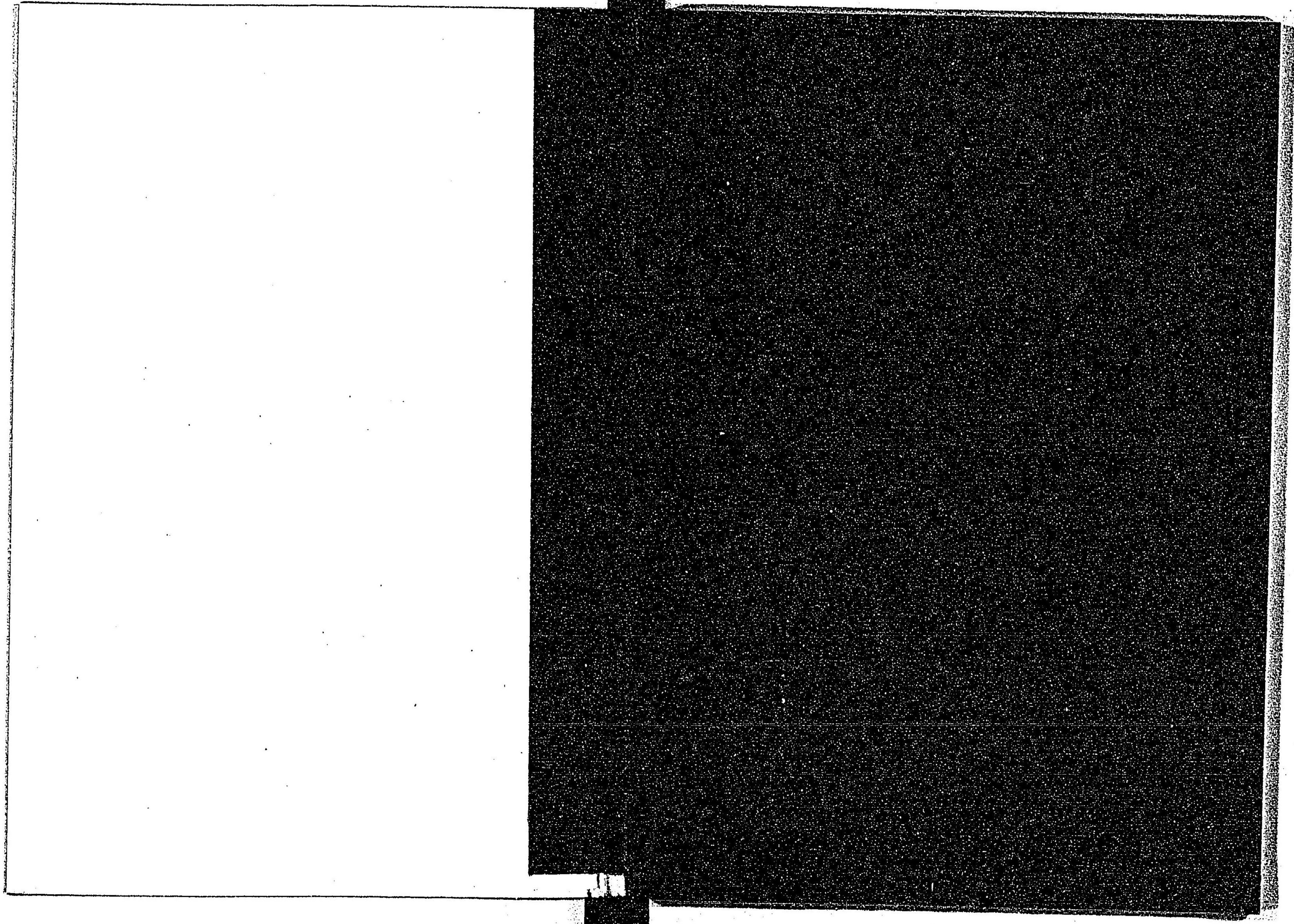
生死の工夫

山室 軍平/著

M38

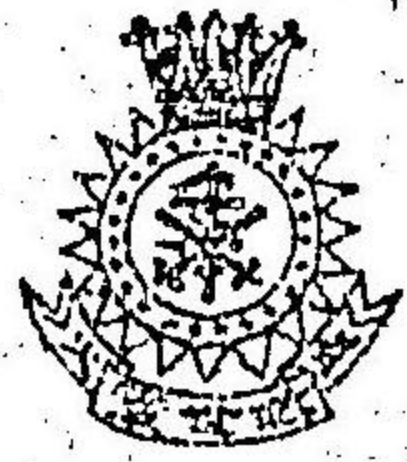
ABI-0750





救世叢書

生死の工夫



少佐山室軍平著

(孫の書局發行)

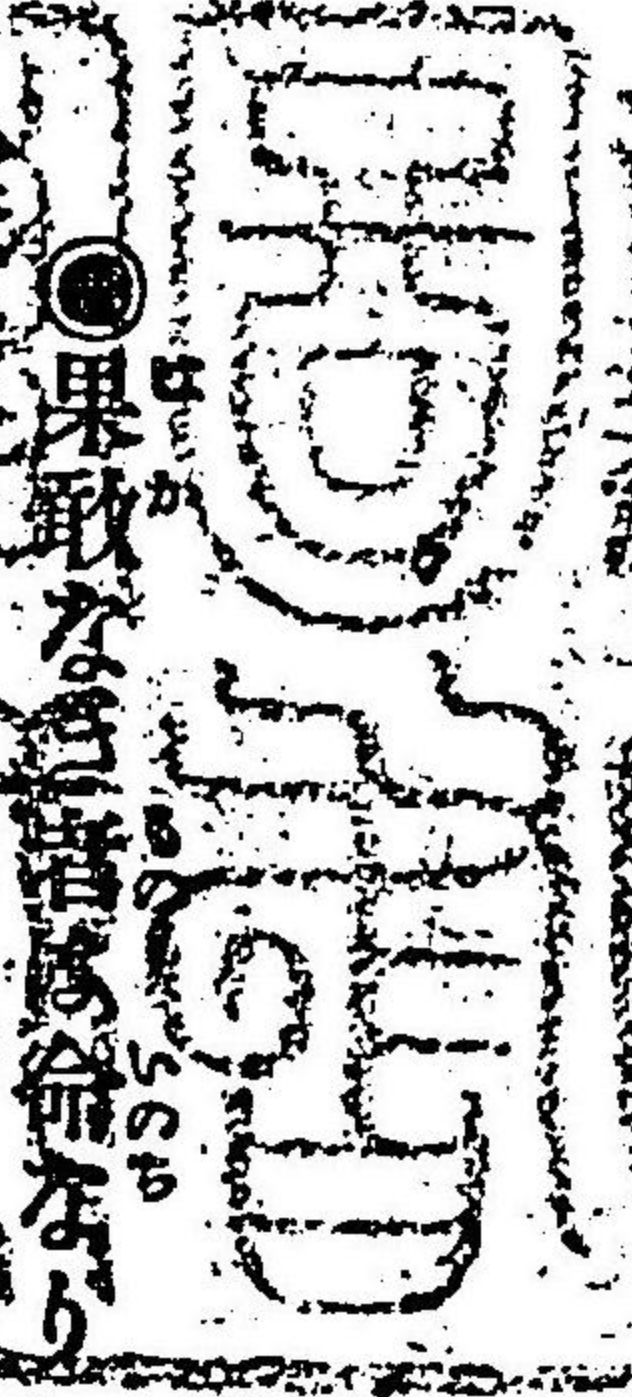
東京 救世軍日本々營

730

確事なる事  
不確なる事

商人と  
船頭

救世軍  
第六卷  
生死の因果



救世軍少佐 山室軍朝治

著7・14  
内交

「人は皆一度死ぬる者なり」といふ程、確實なるとはなく、又いつ死ぬる者なるかは知らぬといふ程、確實なるとはなく、と申すところがあり升。或時一人の商人が船頭の伴に向ひ、「お前のお父さんは何處で死なれたか」と問ふ。「海で果ました」といふ。「それではお前の祖父さんは、何處で死なれたか」。「矢張海で果ました」。「して見ると人間は船頭なんかになつて、海で商賣する者ではないな」といふのを聞いて、船頭の伴は腹を立て、「それでは貴君のお父さんは、何處で果なされたか」といふ。

か」と問から。「壘の上で死ました。「祖父さんは」。「同じく壘の上で死ました」。「して見ると人間は商人なんかになつて、壘の上に寝起をする者ではありませぬ」と、言返したといふ話があり升。此の如く人は海の上で生業を営むと、壘の上に寝起をすると、立派な西洋館に住むと、九尺二間の長屋に居ると、賢さと、愚かなると、老たると、若さとを問ず、凡て皆終には死んで墓に葬らるべき者である。其時學校の教師が一人の生徒に向ひ「貴君は近頃頻りに耶穌教の集會に行くさうだが、一躰宗教を信じ、死る、生るといふ如き問題を考へるのは、大人のすべきと、又老人などに適當したるにて、あなたの様な少年には不必要のとてあります」と、申聞けますと。生徒は答へて、「併し乍ら、先生、此間私しは父に連れられて共同墓地に行て見ましたら、私しと同じ位の、少年の墓所が、幾許もムりました」と言たさうであ

る。所謂老少不定とは此事であり升。歌に「誰が死んだ、彼が死んだといふうちに、我が死んだと人に言はれる」。又「昨日見し人はと問へば今日はなし、明日又我も人に問はれん」。扱も果敢なき者は人間の命であります。

とは云へ、人は死るとを好まぬ者である。成るべく長生をしたい、若し出来るとなら何時迄も、死に居たいといふ、怨のある者であるから。西洋には不老泉といふて、年寄が沐浴をすれば若返る泉があると、あつたときかいふ言傳があり。支那や日本の昔には又不老不死の薬だとか、或は仙人仙術などいふ物語が遺つて居ます。即ち秦の始皇といふ天子は、不老不死の薬を詮索する爲に、徐福といふ者を船に乗せて送り出すと、徐福は我紀州の熊野邊に來たつ切、歸らなかつたとか申し。又漢の武帝といふ人は、お宮を建たり、塔を築いたりして、願

りに仙人を招待したが、仙人は来ないで山師許りやつて参り。散々愚弄致されたる揚句、大に悟る所があり。申さるゝ様。「世の中に仙人などいふ者はない。全く嘘の皮である。唯々食事を控へ、薬を服ば、些とは長生が出来ぬ迄のものである」と、此様に申されたさうであり升。鐵拐仙人の歌に又一仙人は不養生せず、腹立ず、物ほしがらず、それで長生」といふとがある。其故人は衛生を重んじ、軀を大事にして、幾許か長生をするより外に道はない者である。何うせ一度は否が應でも、死なねばならぬ等の者であり升。果して然らば私共は、平生如何なる覺悟を以て世に生き存へ、又如何なる覺悟を以て死を迎ふべき者であるか。之は誰しも、充分本氣で、思案を凝して置べき問題であり升。

●似而非なる安心立命

熟考へて見るに、此世の中に凡そ三通りの考へを以て、死を迎へて居る人々がある様に見受けられます。第一の人は命のある間に、少しでも多く、面白可笑い目をして置かないのが損だと心得る人々である。即ち「葬式を見て初齋値が出来る」「飲めよ食へよ、我等明日死ぬべければ也」といふのは、此人々の心の中であり升。さり乍ら人は其肉體と共に、亦靈魂を有つ者である。口や腹、眼や耳の慾を擅まゝにした丈では、其心が満足しない様に出て居る者であり升。即ち昔ソロモンといふ賢人が、「笑ふ時にも心に悲みあり、歡樂の終て憂あり」といふたる如く。又古人の句に「手に取な矢張野に置けげんげ花」と申すともある通り。此世の中の浮た樂みは、遠方から眺めては、如何にも愉快さうに見えて、扱其實際は案外不全なるものである。「聞て極樂、見て地獄」とは、飲食、男女の慾、其



め、金儲けを急いで、博奕をなし、相場をなし、山師となり、詐偽師となり、斬取強盗をなす者さへ少くありません。現に法律を破つて懲役に行て居る人々の中には、「芳名を末代に残すのが出来ずば、寧ろ悪名を後世にのこし度ものである」と、此ういふ考へにて、今日の有様に陥つた人々が、數多くある様な次第。將又多少所謂功名富貴に有附たる人々の側に於ては、其上別に高尚なる志望も、何も無いものであるから。慢心して不義の快樂を求め、穢れたる行爲をなし、人非人の所業をなす如き者が甚だ多い。昔ルソーと云ふ人は、其頃の華族を論じて、「彼等は人間から墮落して華族になつた者である」と申しました。が。丁度其言の如く今の世の中には、亦人間から墮落して紳士となり、金持となり、地主となり、貴婦人となり、才子、腕利、顔役、勢力家となつて居る者が澤山あり升。此いふわけであるから、唯功名富貴を

求め、何か大袈裟などをやつて死なたいといふ如き方針は、不健全なる世渡の仕方である。辨へある人々の取るべき主義ではムくませぬ。第三の人は人間の生涯は夢幻の如きものである。生ある者の死ぬるといふは、因縁づくである、約束であるから。致方がないとして、只管之を諦め様とする人々である。或時一人の婦人が死な兒を擁へて釋迦の所に参り、之を活かして下されと願ふと。釋迦は答へて、「それでは行て、未だ一度も葬式を出したとのない家から、芥種一握りを貰つて来よ。さすれば兒供を活してやる」と仰せられた。婦人は彼方此方と尋ね廻れ共、ついで一軒、嘗て誰かの葬式を出したとのない家を、見當らぬ故、歸つて其由を申上ると。「然らば此世で愛しさ兒なり、親なり、夫なりに、死別れると申すとは、誰の上にもあると故、自分一人でないと思ふて諦めよ」と、申聞けられたと云とがある。成程釋迦は



釋迦  
めら

死度  
ない死度

釋迦丈、巧いことを教へられたものと思ふ。併し乍ら人は此く「お前一人のとてないから諦める」といはれた許りて、直に諦めのつく者であるかと申すに、仲々然うは参りませぬ。其故昔ギリシヤの國に、七賢人の一人と呼ばれたるソロンは、或時可愛い兒を喪して、絶入る許りに泣き悲みましますから。其友達の一人が、「然う貴君の様に泣いたからと云て、死だ者が歸つて來るてはなし、もう大概にお諦めなさい」と忠告すると。答へて、「さあ其事であります。若し之が泣いて本に戻るものなら、好加減に泣いて止めもせませうが。唯、泣いても、働いても、本へ戻らぬ者と思ふから、眞に悲しくて堪りませぬ」と言ふたさうである。即ち一休和尚の如き悟を開いたる名僧でさへも、死る間際には枕頭を取巻く弟子の僧に向ひ、「死度ないくく」と繰返されたる如き。眞によく人情の眞實を現はしたる話であると思ふ。其故に人は唯諦めると

いふたからとて、此果敢なき身の上を、諦めるとは六かしいものであります。

◎「信仰を懷きて死ねり」

果して然らば私し共人間は、どういふ覺悟を以て此世に生き、又何ういふ覺悟を以て此世を去るべきものであるか。抑々基督の信者、救世軍の軍人などは、何んな風にこの處を考へ、安心立命を持って世を渡る者であるか。之が今から少し許り、お話申上度と思ふ所であります。

信仰  
死を

基督  
者如

新約全書、希伯來書第十一章に、古への信仰上の豪傑のとを書列ねたる中に、一句、「此等は皆信仰を懷きて死ねり」とあり。一言にいへば基督の信者は「信仰を懷いて」此世に生き存へ。又「信仰を懷いて」安心して此世を去り往く者であり升。然らば其信仰とは果して如何な

第一、罪を救はれたる者の信仰

人は皆罪人なり

十字架の耶穌

るものであるかと申すに。

第一、基督の信者は天の神様の前に、己が凡ての罪惡を、皆赦されて居るといふ「信仰を懐いて」生き存へ。又同じ「信仰を懐いて」安心して死する者であり升。元來人は其本心に質して、我は爲すべき善を爲さず、爲すべからざる惡をなせりと感ずる程、心苦しきとはなき者である。「貴きも賤しきも唯名のみにて、まことは同じ罪人ぞかし」。又「世の中はたゞ罪のみぞますかゞみ、うつす姿やいかに醜くさ」。さり乍ら基督の信者は其犯せる罪惡を悔改め、救主耶穌の十字架の贖罪を信仰して、其御救しを受けて居る者である。「夫神は其生み給へる獨子を賜ふ程に世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信する者に亡ぶるとなくして、限なき命を受けしめんが爲なり」。それ故に、基督の救を受たる者はいつ何時、死んで彼世へ參るとも、憚らず神様の御前に入る。用意が調

余は救はれたる者なり

第二、我が子の信仰

ふて居る者であり升。即ちジョン、ハウといふ人が死る間際に、「余は有益なる僕としてに非ず、赦されたる罪人として、我救を預期する者なり」といひ。又有名なる宗教家ジョンズといふ人が、同じく臨終の際に、「一箇の罪人救はれたり、一箇の罪人救はれたり」と呼はりつゝ、死たる如きは、皆此、罪を赦されたりといふ、信仰を懐いて居たるものと、謂はねばなりませぬ。

第二、眞面目なる基督の信者は又、神様の御力に由て其靈魂を入かへられ、我は神様の子供であるといふ「信仰を懐いて」、毎日を送る者にて。随つて此信仰に由り、安心して死ぬるとの出来る者であり升。元來人は罪と惡とに穢れ、義を知つて之を行ふと能はず、不善改むると能はず、言甲斐なき生涯を送る者であれ共。若し一旦翻然として、其既往に犯せる罪を悔改め、基督を信仰するに於ては、神様は曾に其人の過

去の罪を赦すのみならず、又其靈魂を入かへ、心の向きを一轉し給ふ者である。譬へば澁柿の枝を切つて甘い柿を接げば、臺は元の澁柿なれ共、枝には甘い柿が結る如く。人が眞の神様に由て其心を入かへらるゝ時、躰は元の儘の躰なれ共、其中に宿る靈魂は全く新になり。以前は兎角惡に傾いて居た者が、以後は自ら善に傾き。以前は専ら罪と惡魔に事へて居た者が、今度は只管神様の思召を行ふ者となり。又これ迄は萬事利己主義から割出して居た者が、今は愛心を以て之を處置する様になり升。之が即ち更生とも、亦基督の救とも申す惠である。而して人が一旦此惠を受るとになると、最早天の神様に對し、赤の他人でない處か、却つて其子供の一人となるわけの者である。神様の家族に加へらるゝ次第であり升。随つて此いふ經驗を抱いて世渡をする基督の信者に取ては、死るとは故郷に歸るとである。人間といふ子供

が、神様といふ父上の所に、歸國するわけであるから。更に恐るゝ所がない許りか、却つて大なる安心と満足をして、目を眠るとの出来る者であり升。「なか／＼にみそらも近く見ゆるかな、父のますらん國と思へば」。「さらば我うき世の中を飛び去らん、あめなる鶴の翼あたへよ」。基督の御語に、「爾曹心に憂ると勿れ、神を信じ亦我を信すべし。我家の家には第宅多し。然らずば我預て爾曹に之を告ぐべきなり。我爾曹の爲に所を備へに往く」とは、此御約束であります。第三、眞の基督信者は又、平生神様から授けられたる本分を忠實に盡し、此世の務を成終へたりとの「信仰を懐いて、來世に旅立をする者であり升。即ち使徒パウロが「我今犠牲とならんとす、我が世を去る期近づけり。我既に善き戰を戦ひ、既に馳るべき途程を盡し、既に信仰の道を守れり。今より後義の冕我が爲に備へあり」と申したる

は、此意であり升。或時美以派の開祖ジョン、ウエズレーに向ひ、「貴君が若し明晩十二時に死る筈と、定りましたならば、貴君は何ういふ支度をなされますか」と尋ねたる婦人がある。するとウエズレーは答へて、「左様、別段支度といふ程のとはありません。唯今予定して居る通りのとをやつて参る許である。即ち今晚と明朝五時に説教じ。それから馬にて隣町に行つて午後の説教をなし。晩は其地の信者と面會し。それより兼て打合せである通り、友人某氏の家に行き、家族の人々と語り、祈禱して後、一身上のとは悉く之を天父の御手に任せ。十時には床に入つて眠り、其翌朝は天國にて榮の中に、目を醒す丈のとてあります」と申したさうであり升。此の如く我本分を忠實に盡しつゝ、所謂職分の途上に倒るゝといふとは、基督信者が死を待つ心がけてある。眞の基督の僕は「我わが職分を盡したり」との信仰を懐

いて、此世を去り行く者であります。  
 第四、眞の基督の信者は又、天國の榮を望み、來世にて優渥なる神様の御恵を受へざることを信する「信仰を懐いて、此世に暇を告ぐる者であり升。人或は問ん、死し者いかに甦へるや、如何なる身軀にて來るやと。愚かなる者よ、爾が播く所の種先づ死されば生す、死し者の甦るも亦此の如し。壞る者にて播れ、壞ざる者に甦へされ、尊からざる者にて播れ、榮ある者に甦へされ、弱き者にて播れ、強き者に甦へされ、血氣の體にて播れ、靈の體に甦へざるゝ也。丁度地に播れたる種が、一遍死んだと見えて後に、却つて新しい芽をふき出す如く。人間の肉軀の死んで土に還る時、其靈魂は神様の前に出て、新しき靈の生涯を始めるわけの者であります。其故にルーテルは死る間際に、「我等の神は救を與ふる神なり、神は我等が頼りて死を免るべし神なり」と言ひ。

ノックスは、「基督に在て生きよ、基督に在て生きよ、さらば肉體は死を恐るゝに及ばず」といひ。ウエスレーは「何よりも愈りて最も良きは、神我等と偕に在すと成り」といひ。ブリス夫人は又「今主よ來り給へ」といひつゝ、眠に就かれました。主に在て死る死人の最後こそ、眞に美はしいものであります。

◎安心して死し人の實例

先頃旅順の方面に、從軍して居られたる志賀重昂氏の通信のうち。西本願寺の布教師北畠玄瀾といふ僧侶といふ話をせられたる條に。志賀氏が申さるゝ様。「此度の戦争には基督信者にて、劇烈勇壯なる軍を致し、命を國の爲に擲つたる者が殊に多く。中には其臨終の際の勇ましくして、眞に鬼神を泣しむるに足る者が少くない。師等も佛敎の爲に今一層奮發なされ」と申されますると。北畠氏は感慨して「如何にも

自分共の好い戒めてあります」と、返事をせられたと云ふ様などがあつた。此の如く眞の基督の信者は、死を恐れぬ者である。まさかの段に、安心して死る覺悟と、信仰とを有つて居る者であり升。之は外國の話であるが、或時一人の救世軍の兵士が難船して、海に漂ふたる揚句、漸く一つの小さな岩にはい上り。かくして居る間には又何とか、助かる工夫もあるであらふと。心の中に神様を念じ乍ら、待間程なく、兼て相識る、不信心で道樂なる一人の男が、之も同じく瀕をくゞつて、傍までやつて参りました。見れば此男は最早大分弱つて居る様子であるから、棄て置けば直ぐに死んで了ふ様に見える。さりとて岩の上には、到底二人一緒に上る餘地がないのであります、之を見ると先の救世軍兵士は、屹度思ひ定むる所あり、後から來たる男に申す様。「早く來い、來て此岩の上にあがれ。己は基督の救を受て居るから、死んで

も往先が定つて居る。併しお前は未だ其丈の用意がないのであるから、  
 どうかかして命を助かり、一時も早く基督の救を受けよ」と言ひつ  
 つ其手を離し、岩を後から来た男に譲つて置いて。再び濤に漂はされつ  
 つ、行衛も知れずなつたと云とがあります。聖書に「人其友の爲に己  
 の命を捐つるは、之より大なる愛はなし」とあり。今此一人の救世軍  
 兵士は、真によく此聖語を、實地に行ふたものでは有りませぬか。  
 五六年前、救世軍の新聞「閩聲」に、左の如き記事を掲げたことがあり  
 ます。

●目出度き最後(明治廿二年十月一日)

人間誰か一遍死ぬるといふ運命に遭遇さぬ者があらふ。唯萬事を神  
 様に任せ、安然に死ぬると云とは、基督の救を受けたる者でなくて  
 は、出来ないとあります。去九月十三日余は色々の忙がしい用

事を取片付け、夜汽車にて備前の岡山迄参らねばならぬといふ、其  
 朝のとである。兼て大病に罹つて居らるゝ、錦町の山口榮三郎氏  
 (材木屋の主人)が、余の出立する前に是非今一度會ひ度と、いふて  
 居らるゝ由を聞き。大急ぎにて之を訪ねますと。氏は身に危篤の  
 大患のあるとも打忘れたる如く、余の姿を見ると直ぐに身を起  
 し、飛上る様にして其手を伸べ。力一杯握手して申さるゝ様。「今も  
 貴君が来て下さつたを、夢に見て居た處であります。貴君は今日、  
 何時迄時間の都合が附ますか」と、いふとであるから。「十二時迄は  
 差支ありません」と答へると。「それは大きに有難う」と言て、横に  
 なつて一休み致し。聽て起直つて色々の物語を始められました。「私  
 しはこれ迄非常に信仰が冷て、病氣になつて後にも、轉地さへすれ  
 ば直に癒るものゝ様に心得、己を頼んで神様に頼るとを忘れて居ま

したが。否、人間の力といふものは真に弱い者であり升。併し、何卒喜んで下さい。私しは昨夜改めて、これ迄の事を皆神様の前に悔改め、今は聖靈の恵を受けて、本統に溢るゝ喜に満されて居ます。最早少しも思残す所は在ませぬ。イヤもう神様に一切萬事を任せ申す程、世にも楽しい世渡といふがムりませうか。今日は私しの信仰復興のお祝ひ日だから、貴君と一緒に祝ふて戴き度と思ひ、赤飯をたかして置ましたから、何卒一緒に食べて下さい。もう何時私しは天國に行ても可い支度が出来ました」といふとであり升。そこで余も非常に神様の御恵に感じ、聖書に原いて色々信仰上の話をすると、氏は一々うなづいて之を聴き。殊に西洋の或る篤信なる老女が大病に罹つて居る時、見舞の人が「貴女は然うやつて何時迄も寢て居る方が可か、早く天國に行た方が可か」と尋ねると。答へて、

「唯聖旨の儘であります」といふ。「併し若し神様が貴女の註文通りにしてやると仰せられたら、何方を擇びますか」と問返すと。「左様、矢張聖旨の儘になし給へと、言より外はムりませぬ」と、申したといふ物語を致した時には。氏は非常に感激して、「そこで、それが本統に任すといふものである。私し共だつたら、何卒最少の間、此世に置いて下され」と頼む處であつたかも知ない。有難う、復一段恩寵に進んだ心持が致します」と申し。大聲に神様の愛を讃めた。えつゝ、其うち時刻になつたので。一緒に所謂信仰復興の賀、死る用意の出来たる祝ひの赤飯を食べ、暇を告て歸つたのは、午後一時頃であつたかと思ふ。

それから余は飛ぶが如く關西旅行を終へ、十六日の晩に新橋に着くと停車場にて圖らず植村先生に出會ひ昨夜山口榮三郎氏が永眠の

問もな  
く天国  
に行く  
のちやく

我夫の  
霊を受  
け給へ

話を聞きました。其足で直ぐ山口家に行き様子を見たと、其奥さんの話に。「彼からは丸て幼児の様に柔和になり、臨終の際には、もう目が、かすんで来たから間もなく天国に行のちや哩といひ。又現世では一向神様のお爲に何も仕なかつたから、天国に行たら一つ雑巾がけてもさして戴くちや哩と言って、ハ、と笑ひますから。私しが傍から天国の門は今我夫の爲に開て居てせうと申し升と。然ちや」と答へ、聽てニタ／＼と笑ひ乍ら息を引取りましたから。私しは直ぐに基督よ今我が夫の靈魂を受取り給へと、祈りました云々。余は生れてから今日迄、未だ嘗て此ういふ美事なる最後を見たことが有りませぬ。

諸君が罪より救はれて、有用、幸福の生涯を送り。時到了らば安心して死んで天国に入り、限りなき命を樂む人となれんとを祈ります。



A-23

明治三十八年七月十日印刷  
明治三十八年七月十三日發行

定價金貳錢

編輯兼發行人

東京市京橋區南區田町五番地  
ヘンリー・ブライド

發行所

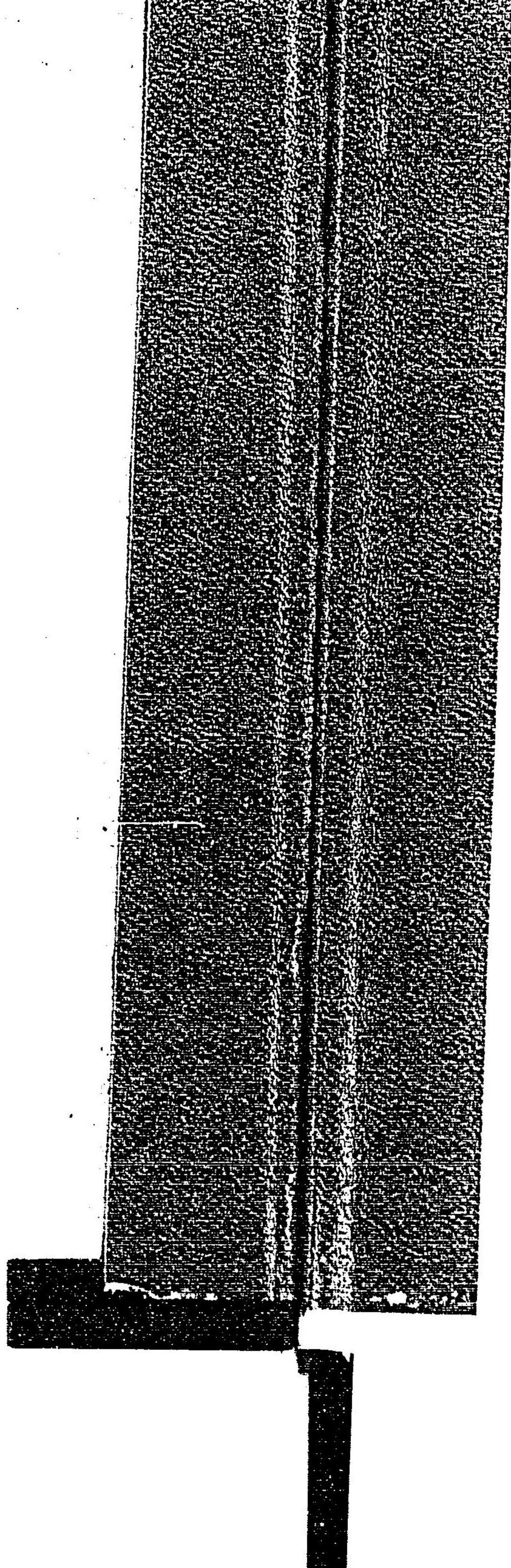
東京市芝區芝口二丁目三番地  
救世軍日本支營  
東京市京橋區西新町廿六七番地

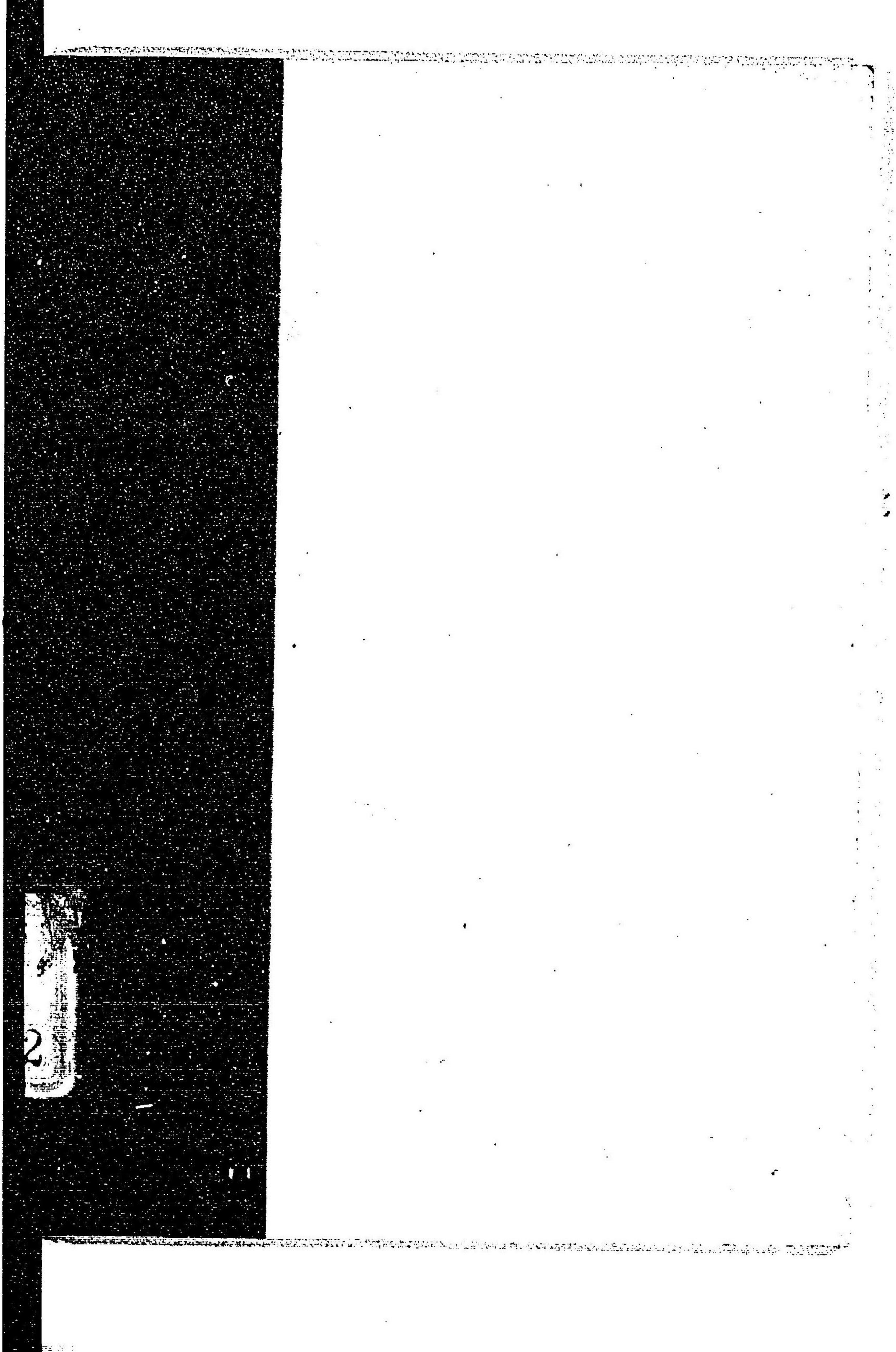
印刷人

太田音次郎  
東京市京橋區西新町廿六七番地

印刷所

株式會社秀英會





2